

ペスタロッチャー教育賞 受賞者紹介

社会福祉法人

広島新生学園

広島新生学園の歴史は、1945年被爆直後の広島で戦災孤児保護の活動に協力していた上栗頼登氏（1919～1995）が、自己資金2000円をもとに宇品の旧砲部隊兵舎の一部を借り受け、16人の保母たちとともに、原爆孤児、戦災孤児、引揚孤児たちの収容施設を創設したことに始まる。同年12月、経営主体を戦災援護会広島県支部（広島県同胞援護財団）におき、市内草津の旧軍人母子寮（1946～47）、基町の旧陸軍野砲隊跡地（1947～71）で、上栗氏の情熱的献身的な努力によって事業が継続された。

当初受け入れたフィリピンからの引揚児たち220人は全員がマラリヤ、チフス、栄養失調等で、頼登氏は病児を日赤病院に背負って行っては死者を連れ帰り、茶毘に付す毎日であった。これらの遺骨は今も学園内の納骨堂に安置されている。つづいて多くの浮浪戦災孤児たちが収容されてきたが、子どもたちは家族を捜し求めるため、またすきんだ心が施設の生活になじめず逃亡を繰り返した。職員たちは連日、市内の駅や繁華街で子どもたちを探し、連れ戻すという苦闘を続けたが、頼登氏は逃亡する子どもたちが施設の貴重な毛布などの物資を持ち出すことを黙認し、「2枚持ち出せばそれを闇市で売って4、5日は暮らせる、ひもじさから盗みをする前に保護しよう」と職員たちに語っていた。孤児たちに何度も裏切られながら、彼らを「天使」と呼び、なおも愛を失うことがなかった氏の姿は、まさに革命戦争後のスイス、シュタンツで孤児たちとともに苦闘したペスタロッチャーと重なり合う。ペスタロッチャーもまた「怠けや気ままな生活やあらゆる粗野」に慣れきった孤児たちに裏切られながら「私は彼らとともに泣き、彼らとともに笑い…彼らのスープは私のスープであり、彼らの飲み物は私の飲み物」「私には何もなく、ただ子どもたちがいる」という精神にいき

ついたのであった。

学園の困難な状況は、その後頼登氏を中心とした職員の幾多の努力により改善され、子どもたちの園生活も落ち着いてきた。卒園生たちが社会で貢献するという成果も表れてきた。しかし、1960年代以降になると、社会の高度経済成長による歪みが学園にも波及してくる。戦災孤児に代わって、ギャングによる家庭崩壊などで置き去りにされた子どもたちの入園が激増するのである。さらに現在では、親の養育責任放棄とともに、「虐待」によって心に深い傷を負った子どもたちが多く保護されている。このような子どもたちに対する愛と献身、大人に不信感をもった子どもの心を開く苦心は依然として変わることではない。事業開始以来、養護した子どもたちは引揚孤児約200人、浮浪児600人、原爆孤児戦災孤児及び一般養護900人以上にのぼっている。

学園は、1971年現在地東広島市西条町に移転し、社会福祉法人となって児童養護の活動に取り組んでいる。施設は10,875㎡の敷地に1,739㎡の児童棟、保育棟やグラウンド、プールを備えたものである。頼登氏の没後、長男哲男氏が施設長となり、頼登氏夫人和子氏を主任保母として、29人の職員が幼児13人、小学生26人、中学生15人、高校生14人を養護し、加えて周辺地域の幼児たちとの混合保育のための「ひまわり園」には約100人の子どもたちが通園している。主任保母和子氏をはじめ26人の指導員、保母は施設内に住み込み24時間態勢の活動である。とりわけ和子氏は、1946年頼登氏の熱意に感銘して結婚以来81歳の今日まで、子どもたちの「お母ちゃん」として、また理想を追求する頼登氏の「叱られ役」として、頼登氏の精神と子どもたちへの細やかな配慮を忠実に受け継ぎ、職員と園児の指導にあたっている。

新生学園の歩みは、戦後から現在にいたるまで困難な教育状況下におかれた子どもたちに向き合い、揺るぎない信念をもって真摯な実践を積み重ねてきたものである。ここにはまさにペスタロッチャーの精神と「教育の原点」が体现されている。広島新生学園の長年にわたる多大な功績に対し、第8回ペスタロッチャー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。